

さわやかトカラ情報

一隅を照らす十島の教育

発行元 十島村教育委員会

〒892-0822 鹿児島市泉町13番13号 ☎099-227-9771

E-mail toshima-ky@tokara.jp

五月…^{ほうき} 幕を握れ

十島村教育長 原口 英典

十島村役場・教育委員会事務局のある鹿児島市泉町の一角に泉公園という名の公園がある。そこには、五代友厚の銅像が建てられている。

その公園を四月に入ってから毎朝、幕を握って清掃している集団がある。聞けば、^{ほうき}に勤めている人たちとのこと。

日本の将来を遠望しているかのごとき五代友厚のそのまなざしを共有しながら、その人たちは、ただ黙々と空き缶やたばこの吸い殻、捨て置かれたものを拾ったり、幕の目を立てたりしている。

動機は何であれ、自ら幕を握る生き方を選び取ったこの人たちの職場での仕事ぶりを思い描いてみる。その社風を想像してみる。思いめぐらすに、物を粗末にしないと同時に、仕事を^{おろそ}かにしない、人をも粗末にしないと同時に、自分をも粗末にしない生き方が見えてくる。きっと素敵なお社風であろう。

渡辺和子さんの書の中に、「はきものをそろえる自由」というエッセイがある。ある時、テストの監督に行っていた渡辺さんの教室にいた大学生の一人が、問題を解き終わったらしく、席を立とうとした。とその時、その学生は、もう一度座り、机上の消しゴムのカスを集めて、ティッシュに包んで目礼してから席を立てていった。その学生は、一見面倒くさい行為を自らの自由な生き方として選び取ったのだ。

これまで、自由な生き方とは、面倒くささとは対極にあるように考えられていた。

先の人たちは、幕を握らない生き方も選べたに違いない。にもかかわらず、最終的には「幕を握る自由」という生き方を選んだ。

「一つ拾えば、一つだけきれいになる」と言われる。単純だけれども、拾うために腰をかがめたり、袋に入れたりという、ある種、煩わしい、面倒くさいことの方の価値に身を置く生き方。そんな生き方を貫いたら・・・。

五月。若葉雨が、街を、山を覆い尽くす日。雨に濡れた野鳥の鳴き声も、雨に吸われるごとく遠ざかっていく。

野の鳥の声空に^し浸み若葉あめ



【十島村中学校連合修学旅行】



(結団式：生徒代表 小林良介君の挨拶) (ホテルへのお礼を述べる日高裕星君)

3年に1回実施される十島村中学校連合修学旅行は、フェリーとしまの船便の心配もあった中、中学生21名、引率の先生10名が宝島折り返し便で5月20日未明に鹿児島港に入港し、スタートを切りました。その夜は船中泊。朝、突りある行事となるべく結団式を終え、午前8時20分にバスにて目的地へと出発しました。

初日は長崎県、2日目は福岡県と九州各地を自主研修を組み込みながら見聞していきます。

【母の日、田知行さんから贈り物】



(田知行さんを囲んでのカーネーションの贈呈式)

今年も本名町で生花店を営む田知行義久さんから「母の日」に贈るカーネーションが、5月10日(金)に本村小中学生全員に贈呈されました。32年前から毎年贈り続けて下さり、かつてカーネーションを贈った子どもが親となり、今では受け取る側になった人もいます。田知行さんは、「母親を大事にしてほしい。お礼の手紙が力になる。」とおっしゃっていました。「心と熱い思い」の贈り物に感謝です。

【鹿児島県教育次長 全島訪問】

5月13日(月)からのレントゲン便にて、県教育庁教育次長、教職員課長、義務教育課長、鹿児島教育事務所長、指導課長をはじめ8人の方が村内全小・中学校を訪問され、確かな教育活動や子どもたちの様子に感銘を受けておられました。

灯

シリーズ 十島の学校にやってきて
口之島中学校3年 蓬原 滯凜

私は、始良市から山海留学生としてこの四月に口之島にきました。小学五年生の時も山海留学生として一年間過ごしたことがあり、今回で二回目になります。

なぜ私がまた口之島に行きたいと思ったか。それは、「志望校に合格するために受験勉強を頑張りたい。」と思ったからです。今の私には、第一志望の高校に合格できる力はありません。だから、これまでの生活を180度変えて、ここ口之島で努力して勉強を頑張りたいです。そして、志望校に合格することで、「頑張っておいでね。」と見送り、応援してくれた人や、支えとなってくれた人たちに恩返しをしたいです。

父の「滯凜を信じて応援してくれる人を裏切るのは絶対にするな。」という言葉をおぼえて、私はこれから精一杯頑張っていきます。

“あきらめることをあきらめる”

絆

シリーズ 山海留学生として学ぶ
小宝島での2年間を振り返って
滝本 渉 現在大学2年生<神奈川県>

私は中学2年と3年の2年間を小宝島で過ごしました。きっかけとしては、前の中学が嫌だと思ふようなことがあって、やめようかということになった際に、留学という選択肢が出てきたことです。どうせなら南に行きたいということで親に調べてもらったところ、たどり着いたのが小宝島でした。

島に行って一番自分が変わったように感じられることは、少し恥ずかしい話ですが、挨拶ができるようになったことだと思います。人数が少なく島民全員顔見知りという環境でしたから、挨拶はしっかりするようとの指導を受けました。正直なところ、この頃がなければ、未だにろくに挨拶もできないような人間だったのだと思います。また、基本的には外遊びなどしないような人間だった私が、学校の校庭に出て、遊んだりするようになったのも記憶に残っています。

島での生活は私に多くの変化を与えてくれました。
(6月号に続く)

【子どもたちの作品】 MBCラジオ
「私たちの作文」2013.2.10放送
高校見学を体験して 宝島中学校2年 伊地知 麻鈴
<宝島中1年時>

次に、鹿児島育英館高等学校に行きました。ここでは学食を頂きました。とてもおいしかったです。

また、教室も見学しました。とてもきれいで清潔感がありました。

そして最後に、鹿児島実業高校に行きました。玄関をくぐると目の前に、サッカーや野球などのトロフィーがたくさんあり、すごいなと思いました。実際に野球の練習を見学させて頂きましたが、とても迫力がありました。

そして、6月15日にこの高校見学で印象に残ったことなどについて、テレビ会議で話し合いました。テレビ会議とは、遠くて会えない人などとテレビを使って会議をするというもので、実際にしてみると、みんなの頭に残っている印象や意見が違ったりしてすごく面白いなと思いました。

最後に、高校見学を体験して、私は中学生になったばかりであり進路のことを考えたことはなかったのですが、今回の高校見学でどのような高校が自分に合っているのがよく分かることができました。

今回のことは忘れず、将来のことに生かしていきたいと思ひます。

十島村の小・中学校からのメッセージ

宝島中学校小宝島分校 教諭 森 信浩

2年前、妻と子ども3人を連れて小宝島に来ました。島に着くと、海の色がエメラルドグリーンで驚きました。

中学校の小規模校での勤務には少し慣れていましたがここでは小3～中3の理科を引き受けることになりました。初めての小学校の授業は中学校とは違っており、試行錯誤を重ねました。しかし、しばらくすると小学生がどの学年でどんな内容を学ぶのか、次の学習内容との関連や重要性が分かってきました。



実際に教えることで小中の単元のつながりも見えてきました。これは、中学校だけの勤務では決して得られない経験です。また、今は専門ではない英語や数学も担当していますが、他教科の勉強がこんなに面白いとは思いませんでした。教える側として、できる限りの教材研究を行うと同時に、過去の自分を乗り越えられる時間を楽しんでいます。

妻も子どもたちも島の豊かな自然を味わっています。夕方の散歩から帰り、野草や温泉で蒸した野菜などを使っておかずを1品。週末は釣りです。釣った魚は必ず食べます。先ほどまで生きていた魚をさばいて食卓へ。「いただきます」は「命をいただく」ことだと、魚と海の神様に感謝しながら残さずに食べています。

また、島民の方々から畑でとれた新鮮な野菜をもらったり、ツツやタケノコ採りに誘われたりします。夜は波の音がBGMで、よく眠れます。夜空を見上げれば満天の星、天の川は本当にミルクの道のように。様々な自然現象を肌で感じながら毎日を過ごしており、この島に来てよかったと思っています。

教員仲間である「あなた」への私からのメッセージ



学校の統廃合が進む中、私は小中併設の小規模校に勤務できて幸運だったと思います。小学生と接し、小中合同で仕事をし、若い先生達の頑張りに驚かされ、島での多くの体験が自分自身の向上につながっています。

次は、「あなた」に島での教育や離島生活のよさを実感してほしいです。